



Activities of The MITSUI Public Relations Committee

三井広報委員会 活動紹介

つながる気持ち。 つながる時間。

人が人を想う。人が明日を想う。

時代を前へ、先へ、次へと導く原動力は

この想いの中にこそ存在していると私たちは信じています。

三井広報委員会はさまざまな文化活動および広報活動を通じて

人と人とのコミュニケーションを深め、

未来につながる文化の懸け橋を築いていきます。



Index

概要	4
現在の主な活動	6
会員会社紹介	10
これまでのあゆみ	19
三井の歴史	30



企業グループの広報活動は、社会との接点に位置しながら、「グループの考え」「グループの真の姿」を社会に伝えて理解を得るところにあります。このような考え方から、個々の企業がそれぞれ独立して単独に努力するだけでなく、グループ企業が力を結集して、一企業で成し得ないようなスケールと内容をもって、社会への還元を図ることも大きな意味を持つという共通認識を持ち、1972年（昭和47年）4月1日、前身の「三広会」（三井系8社の広報活動母体）を発展的に拡充し「三井広報委員会」を発足しました。現在、三井広報委員会の会員会社は24社を数えています。

行 動 理 念

三井広報委員会は、三井グループ各社がまとめ、様々な文化活動および広報活動を通じて、国際交流や地域社会の活性化に貢献するとともに、社会の繁栄と福祉に寄与し、三井グループのより一層のイメージ向上を目指します。



三井広報委員会

行 動 指 針

1. 国際文化交流の推進

三井広報委員会は、国際間の相互理解の促進を図るため、国内外において主催・協賛する各種イベントを通じて、優れた芸術・文化を広く紹介し、国際文化交流を進めます。

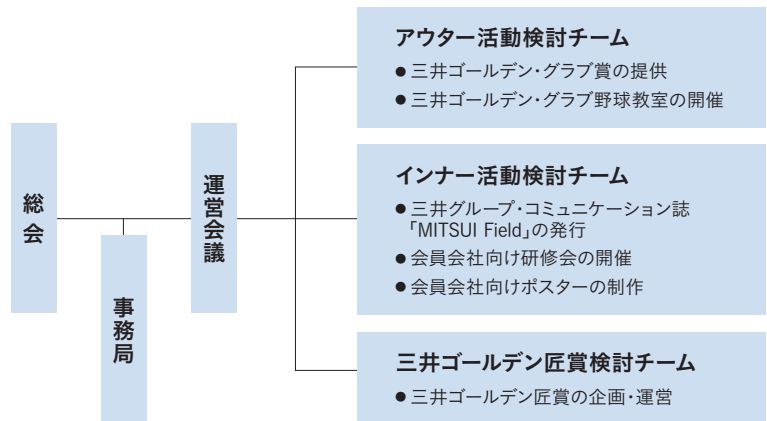
2. 地域文化活動の活性化

三井広報委員会は、日本国内において各地域の主体的参画による芸術・文化活動を後援し、地域社会の活性化に貢献します。

3. 広報活動の推進

三井広報委員会は、三井グループ各社の活動について国内外に広く理解と支援を得るため、多様なメディアを通じて、積極的な広報活動を展開します。

組 織 図





各受賞選手のグラブをかたどって作られるトロフィー

三井ヒューマンプロジェクトは、「人の三井」という三井グループらしさをベースに「人を大切にし、多様な個性と価値を尊重することで社会を豊かにする」ことを目的とした、「三井広報委員会会員会社」「三井グループ全体」「三井広報委員会」のそれぞれが行う社会貢献活動を世の中に発信するための総称です。



ロゴにこめられた想い
人のモチーフをロゴの一部として採り入れ、人を大切に考えるヒューマンプロジェクトの理念を象徴させました。手を上げたシルエットが、自由闊達で活力ある三井グループの気風と、人が伸びやかに育っていく様子を表現しています。



三井ゴールデン・グラブ賞

プロ野球セ・パ両リーグの“守備のベストナイン”を表彰

三井ゴールデン・グラブ賞は1972年にダイヤモンドグラブ賞としてスタートし、1986年に現在の名称になりました。日本プロ野球セ・パ両リーグの第三者公式表彰として制定される本賞は、毎年卓越した守備によりチームに貢献した選手を、新聞社・通信社・テレビ局・ラジオ局のプロ野球担当記者（現場取材経験5年以上）による投票で選ぶ、権威ある賞のひとつです。その年、守備で最も輝いたベストナインの選出に、毎年多くの期待が寄せられています。

選考対象となるプレーヤーの資格

- 投手は規定投球回数以上投球していること、またはチーム試合数の1/3以上登板していること
- 捕手はチーム試合数の1/2以上捕手として出場していること
- 内野手はチーム試合数の1/2以上1ポジションの守備についていること
- 外野手はチーム試合数の1/2以上外野手として出場していること



★モイネロ投手（福岡ソフトバンクホークス）は欠席

三井ゴールデン・グラブ賞 歴代受賞記録		
	セントラル・リーグ	パシフィック・リーグ
最多受賞回数	山本 浩二(広)⑩ 駒田 徳広(横)⑩ 古田 敦也(ヤ)⑩ 宮本 慎也(ヤ)⑩ 菊池 涼介(広)⑩	福本 豊(急)⑫
最多受賞外国人選手	ロベス (De)⑤	マルカーノ(急)④
最多連続受賞	山本 浩二(広) 10年連続／1972～81年 菊池 涼介(広) 10年連続／2013～22年	福本 豊(急) 12年連続／1972～83年
最年長受賞	宮本 慎也(ヤ) 2012年／41歳11ヵ月	稲葉 篤紀(日) 2012年／40歳2ヵ月
最年少受賞	立浪 和義(中) 1988年／19歳2ヵ月	松坂 大輔(武) 1999年／19歳1ヵ月
満票受賞	堀内 恒夫(巨)1972年 高田 繁(巨)1972年 王 貞治(巨)1974年 山本 浩二(広)1975～79年 飯田 哲也(ヤ)1992年	大橋 穰(急)1972年 有藤 通世(口)1974年 福本 豊(急)1976～79年 梨田 昌崇(近)1979年 秋山 幸二(武)1990年

※丸数字は受賞回数 ※球団表記は最終受賞時の所属 ※第53回(2024年度)現在



三井ゴールデン匠賞

揮毫：武田 双雲氏

「未来につながるものづくり」を讃える

伝統文化における革新性とは何でしょうか。三井広報委員会は、日本の伝統を継承しながら未来につながるものづくりに真摯に取り組む、さらに発展させている伝統工芸の担い手の活動にそれを見出しました。私たちはこの賞を通して、日本の伝統を次世代につなぐ取り組みを応援していきます。

第5回 三井ゴールデン匠賞受賞者



池田 晃将氏
商絵・螺鈿／石川県



エコ/プロジェクト実行委員会/
代表:長屋 一男氏
岐阜和傘/岐阜県
※団体として受賞



彦十時絵/
代表:若宮 隆志氏
輪島の塗塗/石川県
※団体として受賞



久恒 俊治氏
加賀友禅／石川県



別府竹製品協同組合/
代表:岩尾 一郎氏
別府竹細工／大分県
※団体として受賞

審査員特別賞



木村 正人氏
津軽塗／青森県



東中江和紙加工生産組合/
代表:宮本 友信氏
越中和紙／富山県
※団体として受賞

奨励賞



東京水引/
代表:中村 江美氏
水引細工／東京都
※団体として受賞



針谷 絹代氏
山中漆器／石川県



三井ゴールデン・グラブ野球教室



三井ゴールデン・グラブ賞 受賞実績のある講師陣による “指導者”のための野球教室

三井ゴールデン・グラブ賞を受賞した元プロ野球選手を講師に招き、“守備”を中心とした野球の基本技術とその指導方法について分かりやすく教える「指導者のための野球教室」を、毎年、全国各地で開催しています。

2010年よりスタートした本教室では、子どもたちの身体に負担をかけない、ケガをしないための正しい練習および指導方法について、講義と実技指導を行います。本教室を通じて指導者の皆さまに正しい野球知識を習得し、日々の指導に役立てていただくことで、ひたむきにプレーする子どもたちの夢を応援します。



<三井グループ関連施設>

三井記念美術館

三井家旧蔵の優れた美術工芸品を所蔵・展示

三井記念美術館は、三井家が江戸時代から収集した美術工芸品約4,000点、切手類約13万点を所蔵しています。

所蔵品は茶道具を中心に、絵画、書跡、刀剣、能面、能装束、調度品など多岐にわたり、国宝6点、重要文化財75点、重要美術品4点を含みます。

館蔵品の展覧会だけでなく、様々なテーマによる特別展を企画・開催しています(常設展示なし)。

東京都中央区日本橋室町2-1-1 三井本館7階
TEL 050-5541-8600(ハローダイヤル)
<https://www.mitsui-museum.jp>



三井記念病院

社会福祉の精神で慈善病院から発展

三井記念病院は、1909年、三井家からの寄付により「三井慈善病院」として開院しました。

生活困窮者を対象に無料で治療を行うという開院趣旨を受け継ぎ、「社会福祉の精神」のもと、100年以上にわたり高度な医療を絶えず提供しています。

東京都千代田区神田和泉町1
TEL 03-3862-9111
<https://www.mitsuihosp.or.jp>



これまで広がり続けてきた三井グループ各社の繋がりをさらに強め、相互理解を深めていくために様々な取り組みを行っています。グループコミュニケーション誌やポスターなどの発行・制作、研修会の開催などを通じて、三井グループの人と人を繋げていきます。

MITSUI Field



三井グループのコミュニケーション誌

三井グループ各社が活躍する分野(Field)と、そこで働く人々を幅広く紹介する三井グループのコミュニケーション誌を年4回発行しています。各社社員が相互理解を深め、三井ブランドの向上をグループ内から促進する働きかけとして制作。各社の最新事業から三井の歴史やゆかりの地、社員のオン・オフタイムまで、毎号多彩な内容を掲載しています。

会員会社向け研修会



会員会社の相互理解と、 広報部門のレベルアップを目指して

会員各社の相互理解の促進と広報部門のレベルアップを目指して各種研修会を開催しています。ディスカッションやグループワーク、施設見学会などを通じ、様々な発見や刺激を得る“学びの場”を提供しています。

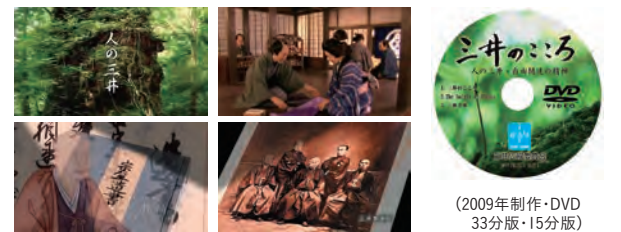
会員会社向けポスター



グループ意識の醸成・向上のために

会員各社におけるグループ意識の醸成と向上を目的に、毎年インナー向けのポスターを制作しています。その年ごとにテーマを設け、会員各社の若手社員にモデルとして登場していただきます。

DVD「三井のころ」



(2009年制作・DVD 33分版・15分版)

自由闊達な三井の気風を紹介する、 社員向けツール

350年超の歴史を誇る、三井の事業精神や先見性・創造性を改めて知っていただくため、グループ社員向けに制作した映像ツールです。「三井家の由来」「三井の事業精神」「三井家から三井グループへ」「人の三井」「三井グループのこれまで、そして未来」の内容で構成しています。

※ ダイジェスト版を三井広報委員会HPでご覧いただけます。





上空から日本橋周辺の眺め。中央に見えるのは、日本橋室町三井タワー。



三機工業

SANKI ENGINEERING CO., LTD.

<https://www.sanki.co.jp>

〒104-8506
東京都中央区明石町8-1
聖路加タワー
TEL 03-6367-7041



三機工業は、1925年の創業以来、建物に様々な設備を提供することで、「建物に生命を与える」仕事をしてきました。長年にわたり培ってきた技術を活かし、快適なビル空間・産業空間を支える空調・給排水・電気・情報通信などの建築設備、機能的な搬送を実現する機械システム、水処理、廃棄物処理設備を提供する環境システム、金融機関の統合・移転をトータルサポートするファシリティシステムなど幅広い事業領域をもつ「総合エンジニアリング」会社です。また、ビル設備(BA)と情報通信(IT)を統合し、ビルの省エネルギーを推進するスマートビルソリューション、厨房設備・食品工場などの食空間のトータルシステムの提案など、独自のエンジニアリングも展開しています。当社はこうした様々な技術を有効に組み合わせお客様にご提案し、持続可能な社会づくりに貢献していきます。



新日本空調

SHIN NIPPON AIR TECHNOLOGIES Co., LTD.

<https://www.snk.co.jp>

〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町2-31-1
浜町センタービル
TEL 03-3639-2700



新日本空調は、ウイルス・キャリア博士が発明した「空調(Air Conditioning)」を基に1930年の創業以来、高度な技術力とパイオニア精神を継承して発展を続けています。そのなかでも世界初の全列車空調や全船舶空調、日本初の超高層ビル「霞が関ビルディング」の空調設備他、革新的なプロジェクトに挑戦してきました。現在では半導体工場やデータセンター、都市再開発など国内外の空調施設を手がけ、日本をはじめアジアの国々の発展に貢献しています。また、新築の他、既存の建物を活かし、設備診断や稼働中の設備の更新を通じて、時代のニーズに応える新たな価値を提供しています。空調技術を核とした環境ソリューションカンパニーとして、建物に新たな風を吹き込み、より良い未来の構築と持続可能な社会の実現に向けて努めてまいります。



三井住友建設

Sumitomo Mitsui Construction Co., Ltd.

<https://www.smcon.co.jp>

〒104-0051
東京都中央区佃2-1-6
TEL 03-4582-3000



三井住友建設は、三井グループの総合建設会社として、土木・建築・海外を3本柱に事業展開しています。土木事業では、業界トップクラスの技術と施工実績を誇るPC(プレストレスト・コンクリート)橋梁を中心に、山岳トンネル、シールド、ダムなどの社会基盤整備に、先進の技術で取り組み続けます。またリニューアル関連の技術にも定評があります。建築事業では、長年培ってきた超高層集合住宅や実績豊かな免制震技術を中心に、事務所ビル、商業施設、医療福祉施設や工場、倉庫など、お客様のニーズに沿ったさまざまな建物を提供しています。海外事業では、東南アジア、インドを中心に、日系企業の進出支援やODA事業を通じた社会資本設備に取り組み、国際社会の発展に寄与します。これらの事業を通じて「くらしをささえるものづくり」に取り組み、社会の発展に貢献してまいります。



サッポロビール

Sapporo Holdings Ltd.

<http://www.sapporobeer.jp>

〒150-8522
東京都渋谷区恵比寿4-20-1
恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 0570-200-533



サッポロビールは「新しい楽しさ・豊かさをお客様に発見していただけるモノ造りを」を経営理念に掲げ、開拓使麦酒醸造所設立以来の、モノ造りへの想いや信念を忘れず将来に伝え、お酒と人との未来を創る酒類ブランドカンパニーを目指します。「サッポロ生ビール黒ラベル」と「エビスビール」の基幹ブランドをはじめ、個性豊かなビールブランドをもつ強みを生かし、全ての商品やサービスにより一層の磨きをかけていきます。新ジャンルでは「サッポロ GOLD STAR」を中心にお客様の期待を超え、RTDは既存ブランドの強化に加えて、新定番となる食中酒の創造をテーマとした積極的な“新価値・新商品”を提案し、次世代ニーズを創出します。海外では好調な「サッポロプレミアムビール」を中心に、北米市場、東南アジア市場でさらなる事業拡大を図ります。また、サステナブルな社会の実現に向けた経営をより一層推進し、持続可能な社会づくりに貢献していきます。



東レ

Toray Industries, Inc.

<https://www.toray.co.jp>

〒103-8666
東京都中央区日本橋室町2-1-1
日本橋三井タワー
TEL 03-3245-5111



東レは、1926年に創業して以来、基礎素材メーカーとして、繊維、樹脂、ケミカル、フィルム、さらには炭素繊維複合材料、電子情報材料、医薬・医療、水処理・環境といったさまざまな分野において多くの先端材料、高付加価値製品を創出してきました。現在、東レグループは国内外に300社以上のグループ企業を持ち、ものづくりの中核である日本国内で創出した製品の用途開発を世界各地で行うことにより、グローバルな規模での持続的な成長サイクルを実現しております。今後も東レグループは、サステナビリティを重んじ、「安全・防災・環境保全」ならびに「企業倫理・法令遵守」を経営の最優先課題に位置づけるとともに、「わたしたちは新しい価値の創造を通じて社会に貢献します」という企業理念のもと、社会に役立つ製品・サービスを提供することで、ステークホルダーの皆様の期待に応えてまいります。



王子ホールディングス

Oji Holdings Corporation

<https://www.ojiholdings.co.jp>

〒104-0061
東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-1111



王子ホールディングスは1873年の創業以来、150年以上にわたり事業領域を拡大し、成長を続けてきました。「革新的価値の創造」、「未来と世界への貢献」、「環境・社会との共生」を経営理念に掲げ、2022年には存在意義（パーパス）を策定。国内外に保有する約63.5万ヘクタールの広大な「王子の森」における持続可能な森林経営を通じ、水源涵養や生物多様性の保全、CO₂吸収など森林の多面的機能の維持、拡大に取り組んでいます。また、木質由来の新素材開発にも力を入れ、石油化学製品の代替を目指し、糖液・エタノールの製造を行うパイロット設備の立ち上げや、セルロースナノファイバーの幅広い用途開発、同じく木質成分であるヘミセルロース由来の医薬品開発などを進めています。今後も、当社グループの事業そのものが持続可能な社会の実現に貢献できるよう取り組んでまいります。



デンカ

Denka Co., Ltd.

<https://www.denka.co.jp>

〒103-8338
東京都中央区日本橋室町2-1-1
日本橋三井タワー
TEL 03-5290-5055



デンカイノベーションセンター

1915年、カーバイドと石灰窒素肥料を製造・販売することを目的に創業。創業期からの基盤技術を活かし、現在は「ICT&エナジー」「ヘルスケア」「サステナブル・リビング」の3つを注力分野に定め事業を展開しています。主要製品には特殊導電材料、機能性セラミックス材料、高機能フィルム、絶縁テープ、インフルエンザワクチン、抗原検査キット等の検査試薬、クロロブレンゴム、特殊混和材、スチレン系機能樹脂があります。「化学の力で世界をよりよくするスペシャリストになる」をパーパスに掲げ、世界に誇れる化学で人々の暮らしと社会に貢献し続ける企業を目指してまいります。



三井化学

Mitsui Chemicals, Inc.

<https://jp.mitsuichemicals.com>

〒104-0028
東京都中央区八重洲2-2-1
東京ミッドタウン八重洲 八重洲セントラルタワー
TEL 03-6880-7500
(コーポレートコミュニケーション部)



三井化学の起源は1912年に遡ります。当時の社会課題であった食糧増産のため、日本で初めて石炭副生ガスから化学肥料原料を生産し、農業の生産性向上に大きく貢献しました。その後、石炭化学からガス化学へとテクノロジーを進化させ、1958年には日本初の石油化学コンビナートを築き、日本の産業界を牽引してきました。今では数多くの世界トップ製品を有しており、世界30の国と地域に150社以上を抱えるグローバル企業へと成長しています。事業ポートフォリオは、豊かな暮らしを実現する「ライフ&ヘルスケア」、社会課題解決に貢献する「モビリティ」、快適なインフラを支える「ICTソリューション」、サーキュラーエコノミー変革をリードする「ベーシック&グリーンマテリアルズ」と多岐に亘ります。三井化学は、今後も卓越したソリューションと「新たな顧客価値の創造」を通じ社会課題の解決に貢献してまいります。



日本製鋼所

THE JAPAN STEEL WORKS, LTD.

<https://www.jsw.co.jp>

〒141-0032
東京都品川区大崎1-11-1
ゲートシティ大崎ウエストタワー
TEL 03-5745-2001



広島製作所

日本製鋼所は1907年、当時の社会が求める素材であった優良な「鋼」の製造から事業を開始し、第二次世界大戦後はいち早く軽量素材として「プラスチック」に着目、基礎材料ベレットの製造から最終製品の成形に至るまでの各種プラスチック用製造・加工機械を世に送り出し、機器の軽量化や省エネルギーに貢献しました。近年は人工水晶や窒化ガリウム（GaN）などの半導体・光学デバイス向け材料、航空機や自動車向け軽量・高強度の複合材料、チタン銅など各種電子機器向け金属材料、廃プラスチックのケミカルリサイクル技術など、超スマート社会・低炭素社会・プラスチック資源循環社会の実現に向けた新技術・新製品開発に注力しております。日本製鋼所はこれからも時代のニーズに応え、『Material Revolution®（材料革命）』の力で社会課題を解決する産業機械と新素材を開発・実装することで、世界を持続可能で豊かにしてまいります。



三井金属

MITSUI MINING & SMELTING CO., LTD.

<https://www.mitsui-kinzoku.com>

〒141-8584
東京都品川区大崎1-11-1
ゲートシティ大崎ウエストタワー
TEL 03-5437-8000



奈良時代養老年間の昔から1200年以上の歴史と東洋一の規模を誇った神岡鉱山。1874年、三井組がこの鉱山の経営を開始したことが当事業の起源です。以来、国内外で鉱山開発・製錬事業を展開、さらには様々な廃棄物から有価金属を回収するリサイクル製錬を展開・強化し、産業の基礎素材である亜鉛、銅、貴金属などを安定的に供給し続けています。また、「マテリアルの知恵を活かす」というスローガンのもと、幅広く事業展開しており、極薄銅箔や自動車用ドアロックなど、世界トップクラスのシェアを占める製品を多く有しています。更に、二輪・四輪車向け排ガス浄化用触媒など、持続可能な社会に貢献できる事業を手掛け、次世代電池（全固体電池）材料の開発にも取り組んでいます。これからも三井金属は、価値ある商品によって社会に貢献していきます。



東洋エンジニアリング

Toyo Engineering Corporation

<https://www.toyo-eng.com>

〒261-8601
千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目1番地
幕張テクニカルセンター
TEL 043-274-1000



東洋エンジニアリングは、さまざまな国・地域でエネルギー開発案件や素材供給のプラント建設プロジェクトを手がけてきました。海外のグループ企業とグローバルネットワーク体制を構築し、アンモニア・尿素といった化学肥料プラント、石油や天然ガスの利用に向けた産業施設や製造設備、電力供給や地熱資源活用のための設備などの設計・調達・建設を行っています。また、持続可能な社会の実現を目指し、環境に配慮したソリューションや最新技術の導入にも積極的に取り組み、脱炭素社会の実現にも貢献しています。当社グループは、ミッションである「エンジニアリングで地球と社会のサステナビリティに貢献する」を果たすために、技術を統合し、全体システムの最適化を実現するエンジニアリングの遂行を通じて、社会に貢献することを目指しています。

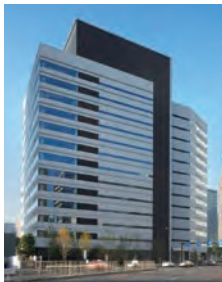


三井E&S

MITSUI E&S Co., Ltd.

<https://www.mes.co.jp>

〒104-8439
東京都中央区築地5-6-4
TEL 03-3544-3147



1917年(大正6年)、旧三井物産造船部として誕生し、創業以来、船用エンジン・港湾荷役クレーンなど事業領域を展開しています。2023年4月からは「株式会社三井E&S」として新体制のもと新たな一歩を踏み出し、得意としているマリン領域を軸とした「Green & Digital」の切り口で事業を発展させる成長戦略を掲げ、脱炭素社会の実現と人口縮小社会への課題解決に取り組んでいます。社名のEとSには“Engineering & Services for Evolution & Sustainability”、持続可能な社会の実現に向けエンジニアリングとサービスで貢献していく私たちの存在意義を込めています。私たち三井E&Sは、事業活動を通じて社会課題の解決に貢献し、持続的成長と企業価値の向上を目指します。



商船三井

Mitsui O.S.K. Lines, Ltd.

<https://www.mol.co.jp>

〒105-8688
東京都港区虎ノ門2-1-1



商船三井は、鉄鉱石、石炭、木材チップなどを運ぶばら積み船、原油を運ぶタンカー、液化天然ガスを運ぶLNG船、自動車船、さまざまな製品を運ぶコンテナ船などによる海上輸送事業、洋上での石油・天然ガス開発等に携わる海洋事業、風エネルギーを用いた風力発電やその周辺事業に加え、海と陸を結ぶターミナル・ロジスティクス事業など、多彩な分野で時代の要請に応えるグローバル企業グループです。海運業を中心に様々な社会インフラ事業を展開し、環境保全を始めた変化する社会のニーズに技術とサービスの進化で挑んでいます。世界最大級の船隊と、140年の歴史、経験、技術をもって展開する活動に、国境はありません。私たちは、強くしなやかな企業グループを目指し、青い海から人々の毎日を支え、豊かな未来をひらき、全てのステークホルダーに新たな価値を届けてまいります。



三井物産

MITSUI & CO., LTD.

<https://www.mitsui.com>

〒100-8631
東京都千代田区大手町1-2-1
TEL 03-3285-1111



三井物産は、社会経済環境そして人々の価値観の劇的な変化のなかにあっても、常に多岐にわたる社会課題やお客様・パートナーの皆さまのニーズに真摯に向き合い、「トレーディング」と「事業経営・事業開発」の両輪での成長を軸とするビジネスに取り組んでいます。それぞれの現場で蓄積された知見をもとに、マーケティング、ロジスティクス、ファイナンス、リスクマネジメント、マネジメント、デジタルトランスフォーメーションといったさまざまな機能とグローバルなネットワークとを掛け合わせ、新たな価値を創出し、日本を含むグローバルなビジネス・コミュニティの責任あるメンバーとして、ステークホルダーの皆さまと共に、環境と調和した持続可能な未来づくりに貢献し続けます。



三越伊勢丹ホールディングス

Isetan Mitsukoshi Holdings Ltd.

<https://www.imhds.co.jp/>

〒160-0023
東京都新宿区西新宿3-2-5
三越伊勢丹西新宿ビル
TEL 03-6730-5003



三越伊勢丹グループは、日本の誇り、世界への発信力を持ち、高感度上質消費において最も支持され、お客さまの暮らしを豊かにする「特別な」百貨店を中核とした小売りグループを目指します。私たちは、いつの時代もお客さまの目線を起点に「世界初」、「日本初」、「業界初」の取り組みをはじめとしたフロンティアスピリッツを携え、創業以来現在に至るまで「暖簾への誇り」を胸に「商い」の本質を追い求めています。先人から受け継いだ「感性と科学」を掛け合わせ、キュレーションと比較購買のできる“非”日常の高感度な空間、そして細部に魂を込めた丁寧かつ繊細で質の高いおもてなしで、世界中の人々の「好き」をつなげてまいります。高感度上質消費を拡大・席捲し、最高の顧客体験を提供してまいります。

MS&AD

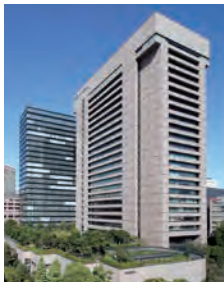
三井住友海上

三井住友海上

Mitsui Sumitomo Insurance Company, Limited

<https://www.ms-ins.com>

〒101-8011
東京都千代田区神田駿河台3-9
TEL 03-3259-3111



三井住友海上は2001年10月に、三井海上と住友海上の合併により誕生しました。2010年4月には、三井住友海上グループ、あいおい損保、ニッセイ同和損保が経営統合し、「MS&ADインシュアランスグループ」が発足しました。

三井住友海上は、グループの中核事業会社として、「グローバルな保険・金融サービス事業を通じて、安心と安全を提供し、活力ある社会の発展と地球の健やかな未来を支える」ことを経営理念に、その実現に向けて取り組んでいます。

今後も、三井住友海上は、社会環境の変化に伴う新しいリスクや多様化するお客さまニーズに迅速かつ柔軟に対応した商品・サービスを提供していきます。

SMBC

三井住友銀行

Sumitomo Mitsui Banking Corporation

<https://www.smbc.co.jp>

〒100-0005
東京都千代田区丸の内1-1-2
TEL 03-3282-1111



三井住友銀行(SMBC)は、2001年4月にさくら銀行と住友銀行が合併して発足しました。2002年12月、株式移転により持株会社である三井住友フィナンシャルグループ(SMFG)を設立し、その子会社となりました。2003年3月には、わかしお銀行と合併しています。三井住友銀行は、国内有数の営業基盤、戦略実行のスピード、さらには有力グループ会社群による金融サービス提供力に強みを持っています。三井住友フィナンシャルグループの下、他の傘下グループ企業と一体となって、お客さまに質の高い複合金融サービスを提供していきます。

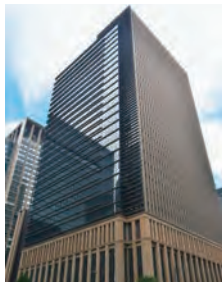
SMFL

三井住友ファイナンス&リース

Sumitomo Mitsui Finance and Leasing Company, Limited

<https://www.smfl.co.jp>

〒100-8287
東京都千代田区丸の内1-3-2
TEL 03-5219-6400



三井住友ファイナンス&リース(SMFL)は、国内トップクラスの総合リース会社です。これまでに培った専門性やグループの総合力を駆使して、お客さまの設備投資や販売活動に役立つさまざまな金融サービスを提供しています。また、成長が続くグローバル市場では、お客さまの海外展開をサポートするとともに、世界屈指の航空機リース事業をはじめとするトランスポーターション分野に注力しています。

社会の変化を捉えた高度なサービスの開発や事業領域のさらなる拡大を図ってまいります。また、環境エネルギー、デジタル、地域社会等に関する取り組みを加速させ、社会の持続的発展に貢献していくことで、次世代に選ばれる企業を目指します。

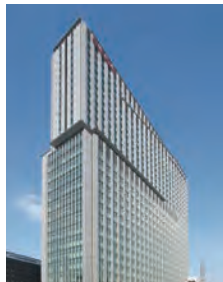
JA三井リース

JA三井リース

JA MITSUI LEASING, LTD.

<https://www.jamitsuilease.co.jp>

〒104-0061
東京都中央区銀座8-13-1
銀座三井ビルディング
TEL 03-6775-3000



JA三井リースは、三井グループ各社とJAグループの出資により設立された総合リース会社です。農林水産分野や船舶・航空機、近年では事業投資も含めたGX・再生エネルギー、不動産・インフラ分野、パートナー連携によるモビリティ分野、米州・アジアを中心とする海外に注力し、金融の枠組みを超えたソリューションを国内外のお客様に提供しております。

デジタルトランスフォーメーションや新しい生活様式の進展など変化の激しい時代において、企業が直面する課題も多様化・複雑化しておりますが、JA三井リースは、経営理念「Real Challenge, Real Change」に掲げる「より良い社会と未来」の実現のため、お客様のビジネスへの思いに寄り添い、ともに課題解決に向けて挑戦を続けてまいります。

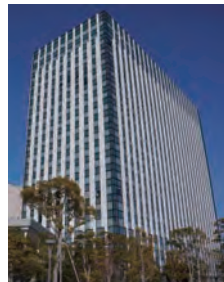
大樹生命

大樹生命

TAIJU LIFE INSURANCE COMPANY LIMITED

<https://www.taiju-life.co.jp/>

〒135-8222
東京都江東区青海1-1-20
TEL 03-6831-8000



1927年に三井生命保険株式会社として創業した当社は、2016年4月に日本生命保険相互会社との経営統合による新体制を発足し、2019年4月に「大樹生命保険株式会社」に社名を変更しました。当社は「いつの時代も、お客さまのためにあれ」という創業の精神を大切にし、あらゆる業務分野においてお客さま本位の業務運営の推進に努めております。これからもお客さまの「BEST パートナー」として、様々なニーズに応える保険商品の提供やサービスの向上に取り組むとともに、サステナビリティ経営を軸とした事業活動を通じて、社会課題解決に貢献し、社会的価値の向上に努め、多くのお客さまや社会から必要とされ、選ばれ続ける会社を目指してまいります。

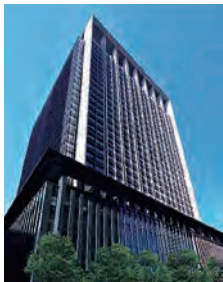
三井住友信託銀行

三井住友信託銀行

Sumitomo Mitsui Trust Bank, Limited

<https://www.smth.jp>

〒100-8233
東京都千代田区丸の内1-4-1
TEL 03-6256-6000



三井住友信託銀行は、2011年4月に発足した持株会社「三井住友トラスト・ホールディングス(現：三井住友トラストグループ)」の傘下にあった中央三井信託銀行、中央三井アセット信託銀行および住友信託銀行の3社が2012年4月に合併して発足しました。三井住友トラストグループの存在意義(パーパス)「託された未来をひらく」を社員一人ひとりが胸に抱き、銀行業務のみならず信託、不動産といった高度な専門性と多彩な商品・サービスを駆使し、お客さま一人ひとりの世代やライフプランに応じたソリューションを提供してまいります。



三井不動産

Mitsui Fudosan Co., Ltd.

<https://www.mitsuifudosan.co.jp>

〒103-0022
東京都中央区日本橋室町2-1-1
TEL 03-3246-3131



三井不動産は、旧三井合名不動産課を引き継ぎ1941年に設立されました。その後、時代の変化に対応しながら、オフィスビル、商業施設、物流施設、ホテル・リゾート、住宅などの開発、これらを組み合わせたミクストユースの街づくりを国内外で推進しています。

2024年4月にはグループ経営理念を再定義。共生・共存・共創により新たな価値を創出する、そのための挑戦を続けるという意味が込められる「&マーク」の理念をGROUP DNAとして定めるとともに、経営理念を凝縮し、当社グループが進む方向性を示すコーポレートメッセージ「さあ、街から未来をかせよう」を定めました。あわせて、グループ長期経営方針「&INNOVATION 2030」を策定。これからも三井不動産は「産業デベロッパー」という「プラットフォーマー」として、社会の付加価値の創出や新産業の創造に貢献していきます。



三井倉庫
ホールディングス

三井倉庫ホールディングス

mitsui-soko HOLDINGS Co., Ltd.

<https://www.mitsui-soko.com>

〒105-0003
東京都港区西新橋3-20-1
TEL 03-6400-8000
※2025年5月 〒103-0015
東京都中央区日本橋箱崎町19-21 MSH日本橋箱崎ビルへ
移転予定



三井倉庫グループは、1909年の創業以来、多様化する社会やお客様のニーズに100年以上にわたりお応えし続けております。日々の快適な生活を支えているさまざまな製品や情報資産などを大切にお預かりするという倉庫業で培ったDNAをもとに進化を続け、現在では製造工程における構内物流から、陸・海・空の輸送、保管から配送など、物流の川上から川下まで全てのニーズに対応しうる物流機能を総合的に揃えるに至りました。

私たちは常にお客様の視点に立ち、お客様が考える「価値」を共有し、お客様の課題に真摯に向き合い、共により良い社会の実現を目指す総合物流企業であり続けたいと考えております。

「社会を止めない。進化をつなぐ。」というパーパスのもと、社会およびお客様の持続的成長と当社グループの企業価値向上に努めてまいります。



エームサービス

AIM SERVICES CO., LTD.

<https://www.aimservices.co.jp>

〒107-0052
東京都港区赤坂2-23-1
アークヒルズフロントタワー
TEL 03-6234-7500



エームサービスは、1976年に三井物産株式会社と米国のサービスマネジメント大手アラマーク社を含む企業グループの合併による給食事業会社として設立。オフィス・工場から始まった事業領域は、病院・高齢者向け施設、学校、会議・研修施設、スタジアム・エンターテインメント施設におけるフード&サポートサービスやリフレッシュメントサービスへと拡がり、食の提供から、食を通じたホスピタリティを提供する企業へと発展。今日では、グループ全体で全国約3,500カ所の施設において、1日約140万食の食事やサービスを提供しています。当社の従業員一人ひとりが、ブランドコンセプトである「Touch your heart ～ “ありがとう”の数だけ、私たちがいる～」を胸に、社会に貢献できる“ホスピタリティサービス・カンパニー”としてまい進してまいります。

History

三井広報委員会

これまでのあゆみ



三井広報委員会の前身は、1961年に8社が集まって発足した「三広会」でした。それから11年後、三井グループの真の姿を伝えようと「三広会」を発展的に解消し、新たに31社が集まり「三井広報委員会」を発足。グループの総力を結集して社会の発展に寄与するという使命を胸に、新たなスタートを切りました。それ以降、国内外問わず様々な文化活動や広報活動に取り組んでまいりました。

1961

〔昭和36年〕

- 三井広報委員会の前身である「三広会」発足。
- 三井物産が提供していたテレビ番組「兼高かおる世界の旅」が三広会の提供となる。女性ジャーナリストの兼高さんが旅をしながら世界各地を紹介するもの。63年から10年間、番組内で「三井クイズ」を行い、当選者39名を香港やパリに招待。人気教養番組として注目を集める。



「三広会」の発足を伝える1961年1月1日付けの三友新聞



テレビ番組「兼高かおる 世界の旅」を提供

1969

〔昭和44年〕

- ロサンゼルス上空に日本語の文字「三井グループ」を描き出したコマースシャルが、「日本民間放送連盟年間表彰・テレビコマースシャルの部」で金賞受賞。

1970

〔昭和45年〕

- 三井物産が三井グループのPR誌「三井グラフ」を創刊。創刊号の特集は、同年開催された「日本万国博覧会」。



「三井グラフ」創刊号

1972

〔昭和47年〕

- 三広会を発展的に解消し、「三井広報委員会」発足。
- 「兼高かおる 世界の旅」の提供も三井広報委員会となる。三井グループといえは「兼高かおる 世界の旅」といわれるほど人々に親しまれ、三井グループのイメージアップに貢献した。
- 三井物産スポーツ用品販売がプロ野球セ・パ両リーグに申し入れていた「ダイヤモンドグラブ賞」の制定が承認される。現在の「三井ゴールデン・グラブ賞」である。



「三井広報委員会」の発足を伝える1972年3月30日付けの三友新聞

1977

〔昭和52年〕

- 「兼高かおる 世界の旅」の提供を終了し、新たにクイズ番組「世界をあなたに」を提供。

1978

〔昭和53年〕

- 「世界をあなたに」に替わり、世界各国の経済、文化、芸術などを紹介しながら、日本との関係をテーマにした教養番組「世界にかける橋」の提供開始、1982年まで続ける。80年からは、番組中に鳥飼玖美子さんの「ワンポイント英語コーナー」を設けて好評を博す。



テレビ番組「世界にかける橋」に登場した鳥飼玖美子さんの「ワンポイント英語コーナー」

1980

〔昭和55年〕

- 三井物産より「三井グラフ」の企画・編集・発行を引き継ぐ(42号より)。



三井広報委員会発行となり最初の「三井グラフ」42号

1981

〔昭和56年〕

- 360度のパノラマ展望が楽しめる東京・霞が関ビルの36階に、三井グループの活動をパネルや写真で紹介する「三井スカイプロムナード」をオープン。連日500人近い入場者でにぎわう(1990年終了)。



霞が関ビル36階にオープンした「三井スカイプロムナード」

1960年代

1970年代

1980年代

三井グループの広報活動を 共同で行う「三広会」がスタート

1960年12月、東京都中央区日本橋室町の三井本館に、三井銀行（現・三井住友銀行）、三井物産、三井化学工業（現・三井化学）、三井金属、三井石油化学工業（現・三井化学）、三井精機工業、三井造船（現・三井E&S）、三井船舶（現・商船三井）の8社が集まり、三井グループとして国内外向けに広告宣伝を共同で行うことを目的に、1961年1月1日を期して現在の「三井広報委員会」の前身となる「三広会」を設立することが決まりました。当時は戦後の成長期の中で各企業グループの求心力が求められていた時期で、すでに三菱グループや住友グループでは共同でテレビ番組を提供するなどしており、三井グループ内でもPRの共同化を求める声が高まっていました。三広会は設立と同時に、当時三井物産が提供していたテレビ番組「兼高かおる 世界の旅」のお正月特別番組にグループ各社で共同参加するという形で、三井グループのPRを具体化。同年7月からは三井

物産の単独提供から三井グループの共同提供に変わり、1972年には現在の三井広報委員会へと引き継がれ、三井グループとして16年間にわたってスポンサーを務めました。

「三広会」を発展的に解消し、 新たに「三井広報委員会」が発足

1972年4月、三広会を発展的に解消し、三井広報委員会を発足。三広会は、企業が単に経済活動を行っていけば良いという時代は終わり、これからは企業も社会との調和や社会貢献に努力していかなければならないこと、また、三井グループが発展していくためには、「グループの考え」や「グループの真の姿」を社会に伝えて「理解」を得ることが必要であり、社会に認められるための「努力」が重要であると考えました。そして、三井グループの真の姿を社会にアピールするためには、個々の企業がそれぞれ単独に努力するだけでなく、グループ企業が総力を結集して一企業では成し得ないようなスケールと内容をもって社会貢献を行うことが不可欠であることから、

当時19社で構成されていた三広会をさらに拡充し、新たにグループ31社を結集した三井広報委員会をスタートさせました。三井広報委員会の目的は、国内や海外における三井グループの広報活動を推進し、社会の繁栄と福祉に寄与する三井グループのイメージを高めて広く内外に定着させることにあり、この目的を達成するために常に会員各社が知恵を出し合いながら時代の要請に的確に応える活動を展開し、今日に至っています。

「三井グラフ」が三井広報委員会の 広報誌となる（1980～2005）

1980年、三井広報委員会は三井物産が1970年より発行してきた広報誌「三井グラフ」（季刊）を42号から引き継ぎ、グループ外へ向けてのPR誌として、三井グループの活動を広く一般の方に知ってもらい、そのイメージアップを図ることを目的に発行をスタートさせました。1990年には当初の「三井グループ外向けのPR誌」というコンセプトを、グループ各社員

にも三井広報委員会の活動を理解してもらうために「三井グループ内外向けPR誌」に改め、全国の図書館、宿泊施設、病院などのほかグループ各社にも配布し、グループ内外に幅広く親しまれる広報誌を目指しました。（2005年141号をもって休刊）

全国各地へ日本を代表する 知性との出会いの場を提供する 「三井シンポジア・トゥモロウ」 （1983～98）

1980年代、首都圏のみならず全国各地の産業や文化が活発になっていく時代の中、三井広報委員会は各地の文化活動を応援していく方針を決め、その具体化を探っていました。そこで、1974年から三井物産が各都市で開催していた地域文化の活性化に貢献する三井教養セミナー「学びの出発」を引き継ぐかたちで更に内容を充実させ、1983年からは地域社会の主体性と参加性を重視した新しいシンポジウム形式の文化活動「三井シンポジア・トゥモロウ」をスタートさせました。コンセプトは、「学

び・考える」ことに真剣に取り組んでいながら中央の文化に接する機会の少ない全国各地の人たちに、日本を代表する優れた知性との出会いを提供しようというもので、地元の自主性にポイントを置いた地元主導型のセミナー（講演会）として行うところが大きな特徴でした。しかし、スタート当時は珍しかったこの種のセミナーも、90年代に入ると全国各地で頻繁に行われるようになり、「開拓者」としての役割は終わったとの認識で、1998年3月を最後に終了することになりました。「三井シンポジア・トゥモロウ」は、16年という長期間にわたって、全国約370カ所で開催され、その聴講者の数は延べ13万人以上となりました。

日本の現代文化を海外に紹介する 「クローズアップ・オブ・ジャパン」 （1983～98）

経済大国として世界経済への日本の影響力が大きくなるにつれて諸外国からの誤解や摩擦が増え、深刻な問題になりつつあった80年代。その原因が相互のコミュニケーション不足

とカルチャーギャップにあるのは明らかでした。世界と日本の相互理解の溝が深まっていく現実を目の当たりにし、孤立感を強めていく日本の状況を憂慮した三井広報委員会では、現代の文化を中心として日本のありのままの姿を世界中の人々に紹介し、そこから日本に対する真の信頼と理解を得ることを目的とした企画を検討しました。その結果、1983年に始まったのが「クローズアップ・オブ・ジャパン」です。それまで日本の紹介といえば、貿易を目的とした商品の展示や古い伝統芸術といった内容ばかりでしたが、「クローズアップ・オブ・ジャパン」は現代の日本の文化が欧米の文化先進国と比べても決して見劣りしないことを示すために日本の多彩な現代文化を紹介することに主眼を置いた、民間として初めての試みとなりました。第1回は1983年9月からサンフランシスコで開催され、以降は毎年、ロンドン、ニューヨーク、ミネアポリス&ロサンゼルス、パリ、シドニー、バンコク、トロント、クアラルンプール、ベルリン、リスボン、アトランタ、サンパウロ&リオ・デ・ジャネイロ、ジャカルタ、ニューデリー、モスクワと、16年にわたって世界18都市で開催し、皇室の方々と各国の重鎮

1983

[昭和58年]

- 全国各地で日本を代表する知性ととの出会いを提供しようと、各界の第一線で活躍中の多彩な講師陣をそろえたシンポジウム形式の文化活動「三井シンポジア・トゥモロウ」をスタート。
- 日本の現代文化を海外に紹介し、国際間の相互理解を深めることを目的とした国際文化交流事業「クロースアップ・オブ・ジャパン」の第1回をサンフランシスコで開催。日本の“生の文化”を紹介する民間初の文化交流活動として、国内外で注目を集める。



「三井シンポジア・トゥモロウ」



「第1回クロースアップ・オブ・ジャパン」
三宅一生 ポディ・ワークス

1985

[昭和60年]

- ロンドンで開催された「第2回クロースアップ・オブ・ジャパン」には当時皇太子の浩宮殿下(今上天皇)が来場されるなど、皇室の方々や各国の重鎮も来場された。



「第2回クロースアップ・オブ・ジャパン」オープニング
セレモニーには浩宮殿下(今上天皇)も来場

1986

[昭和61年]

- 三井広報委員会が従来の「ダイヤモンドグラブ賞」の提供を引き継ぎ、「三井ゴールデン・グラブ賞」と名称を改め、新たなスタートを切る。



三井広報委員会の提供となり新たなスタートを切った
「第15回三井ゴールデン・グラブ賞」の表彰式

1988

[昭和63年]

- 世界各国の代表的な現代演劇人やグループなどを招いて、生のステージを紹介する「三井フェスティバル東京」をスタートさせ、1996年まで隔年で計5回開催。演劇をはじめ、ダンス、バントマイムなど日本で初めて紹介されたプログラムも多く、観客に新鮮な感動を与える。



「第1回三井フェスティバル東京」日本および
韓国の演劇のほか、フランスとブラジルのダンス、
インドの古典舞踏を紹介

1992

[平成4年]

- 三井広報委員会創立20周年を記念して「山下洋輔ピアノコンサート」を開催。



三井広報委員会20周年記念「山下洋輔ピアノコンサート」

1995

[平成7年]

- 「三井グラフ」100号記念号を発行(創刊25周年)。その後2005年141号をもって休刊。

1998

[平成10年]

- 「三井シンポジア・トゥモロウ」の特別企画「誰でもわかるオペラ入門」を東京で開催。
- 「クロースアップ・オブ・ジャパン」や「三井フェスティバル東京」などの文化活動が国際交流に果たした貢献度が評価され、外務大臣表彰を受ける。
- 「クロースアップ・オブ・ジャパン」「三井シンポジア・トゥモロウ」などの文化事業を見直し、新たな文化支援活動「三井コラボレーション」をスタート。国内第1弾は沖縄県那覇市でりんけんバンドとの共演による「国府弘子サウンドスケッチinジャパン」。



小渕恵三外務大臣(当時)から「外務大臣表彰」を受ける八尋会長(当時)



「三井コラボレーション」記者発表会(1998年12月)

1990年代

が来場されるなど注目度も高く、毎回熱狂的ともいえる大きな反響を呼びました。優れた日本文化は世界的にも第一級の文化であることが海外の人々にも理解され、文化によるコミュニケーションの輪が大きく広がりました。「クロースアップ・オブ・ジャパン」は1998年のモスクワを最後に、新たな文化支援活動「三井コラボレーション」に引き継がれることになります。

プロ野球の守備の ベストナインに贈られる 「三井ゴールデン・グラブ賞」を提供 (1986～)

1986年12月、プロ野球の守備のベストナインに贈られる「三井ゴールデン・グラブ賞」の表彰式が東京・大手町の三井物産本社で盛大に行われました。前年度までは三井物産スポーツ用品販売が提供スポンサーとなり「ダイヤモンドグラブ賞」の名称で表彰が行われていましたが、第15回を迎えたこの年度から三井広報委員会が提供を受け継ぐこととなり、名称も「三井ゴールデン・グラブ賞」に改め新たなスタート

を切った最初の表彰式でした。それまでの表彰は、翌年の開幕戦時期に受賞選手に対して個別に行われていましたが、この年度からプロ野球シーズン後に受賞選手全員を一堂に集めて表彰することとなり、表彰式は一層華やかなものになりました。また、表彰式には都内の養護施設の子どもたちを招待し、表彰式後の懇親パーティで憧れの選手とにこやかに話す風景なども見られました。2008年からは表彰式の開催を夜から昼にうつし、毎年多くの報道陣が集まるなか、その年の守備のベストナインの表彰に注目が寄せられています。「ダイヤモンドグラブ賞」として本賞が制定された1972年から40周年にあたる2011年には、記念特別番組(BSフジ)や記念冊子を制作し、40年の軌跡を改めて振り返りました。また第40回表彰式には、ゲストにセ・パ両リーグの最多受賞回数記録を持つ福本豊氏(元阪急ブレーブス)と山本浩二氏(元広島東洋カープ)を迎え、受賞選手にゴールデン・グラブトロフィーを手渡すプレゼンターを務めていただきました。そして2021年、本賞は記念すべき50回の節

目を迎えました。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、表彰式は前年に続き縮小して開催。初受賞の選手5名と、両リーグを通じ最多得票を獲得した甲斐拓也選手(福岡ソフトバンクホークス)に、黄金のトロフィーを贈呈しました。式には、特別ゲストとして第1回から第9回まで9年連続で本賞を受賞している福岡ソフトバンクホークス・王貞治会長が来場。式で祝辞の言葉をいただいたほか、王会長と三井広報委員会・小野澤康夫委員長(当時)との対談も実現し、その模様は三井広報委員会のウェブサイトで掲載されています。また、50回を記念した特別企画「三井ゴールデン・グラブ レジェンズ」を実施。歴代受賞者のうち3回以上の受賞経験者を対象に、一般投票で「最強の守備陣」を選ぶもので、プロ野球ファンから約3万票が集まった結果、投手:桑田真澄氏、捕手:古田敦也氏、一塁手:王貞治氏、二塁手:菊池涼介選手、三塁手:中村紀洋氏、遊撃手:井端弘和氏、外野手:イチロー氏、新庄剛志氏、秋山幸二氏が選ばれました。

東京で本格的な国際舞台芸術祭 「三井フェスティバル東京」を 隔年開催(1988～96)

三井広報委員会は、内から外への国際交流として「クロースアップ・オブ・ジャパン」を世界各地で開催しましたが、1988年からは外から内への文化事業として、東京で本格的な国際舞台芸術祭「三井フェスティバル東京」をスタートさせました。当時、世界各地で舞台芸術のフェスティバルは盛んに行われていましたが、国内ではほとんど実績が無く、国際都市・東京に世界の舞台芸術が集まる祭典がないのはいかにも寂しいということで、東京で初めて国際的な芸術祭を開くことになりました。「三井フェスティバル東京」は、1988年から96年までの隔年に計5回開催し、日本の舞台芸術界に大きな足跡を残しました。

三井広報委員会の20周年を記念し、 「山下洋輔ピアノコンサート」を開催

1992年は、三井広報委員会が発足してから

ちょうど20周年、「クロースアップ・オブ・ジャパン」のスタートから10年目に当たる年となり、これを記念して11月に東京・池袋の東京芸術劇場大ホールで「山下洋輔ピアノコンサート」を開催しました。コンサートは「クロースアップ・オブ・ジャパン「トロント1990」」でのコンサートを再現したもので、和太鼓のレナード衛藤氏との二重奏や井上道義氏指揮の新日本フィルハーモニー交響楽団との協奏「ラブソディー・イン・ブルー」も演奏され、会場を熱気の渦に巻き込みました。コンサートの後、会場に隣接するホテルで20周年記念のレセプションを開催し、各界諸氏やマスコミ関係者など約400人が列席。挨拶に立った三井広報委員会・八尋俊邦会長(当時)は、「三井グループの文化支援活動を景気の動向などに左右されることなく持続させ充実させていく」と力強く誓い、会場は大きな拍手に包まれました。

三井広報委員会の国際文化支援活動が 「外務大臣表彰」受賞

1998年7月8日、「クロースアップ・オブ・ジャパン」などの開催を通して国際文化交流の推進に貢献した功績に対し、外務省から「平成10年度外務大臣表彰」が授与されました。授賞理由は「同団体は三井グループ各社が参加して、わが国の現代芸術を海外に紹介する『クロースアップ・オブ・ジャパン』を諸外国において毎年開催、さらに外国の舞台芸術をわが国に紹介する『三井フェスティバル東京』を隔年開催し、これらの事業を通じて我が国と諸外国との国際文化交流および相互理解の増進に多大な貢献をした(要旨)」というものです。東京・港区の外務省飯倉公館で行われた表彰式では、小渕恵三外務大臣(当時)から八尋俊邦会長(当時)に表彰状が手渡され、民間企業関連では唯一の受賞となりました。

これまでの文化支援活動を さらに進化・発展させた 「三井コラボレーション」 (1998～2004)

1999

[平成11年]

- 「三井コラボレーション」海外第1弾は1999日中文化友好年事業の一環として、日本側の主役に和泉元彌氏を起用した楽曲劇「天人」を北京で開催。
- 社会貢献活動の一環として、障がいのある方々が働く小規模共同作業所で作られた商品を販売する「ふれあいマーケット」の1回目を「三井コラボレーション」の会場(札幌)で開催。



「ふれあいマーケット」

2000

[平成12年]

- 日蘭交流400周年を記念して「三井コラボレーション」の海外第2弾「安倍圭子マリンバコンサート」と、CGアーティスト・原田大三郎氏とテクノミュージシャン・スピーディJ氏のコラボレーションライブをオランダで開催。
- coba氏プロデュースの「三井コラボレーション『光と音のページェント』天使は空から降ってくる。」を福岡で開催。



coba氏プロデュース「三井コラボレーション『光と音のページェント』」

2001

[平成13年]

- 「三井コラボレーション『リーディングドラマ』天国の本屋」を開催。以降も各地で再演を重ねる。
- 芝居と音楽を融合した「三井コラボレーション『ドラマコンサート“ミッシング・ピース”』」を東京で上演。
- イギリスにおける日本年JAPAN 2001の公式行事として、「三井コラボレーション」の海外第3弾「仮面舞踏劇『天照』」、「ジミー大西×ジェーン・バッカー エキシビジョン『Energy of Nature』」をロンドンで開催。



「リーディングドラマ『天国の本屋』」



「仮面舞踏劇『天照』
AMATERASU, The Sun Goddess」



「ジミー大西×ジェーン・バッカー エキシビジョン『Energy of Nature』」

2002

[平成14年]

- 「ジミー大西展『Energy of Nature』」を恵比寿ガーデンプレイス、京都駅コンコースにて開催。その後、2004年5月まで全国通算13カ所で開催される「ジミー大西絵画展『世界を巡る絵筆の冒険』」に特別協賛(主催:朝日新聞社)。

2003

[平成15年]

- 文化・教育・福祉の支援プログラムとして全国各地にクラシックの演奏家を派遣する「ふれあいトリオ」をスタート。2008年までに、北海道根室から鹿児島県沖永良部島まで、全国各地で約250公演を行う。



「ふれあいトリオ」

2008

[平成20年]

- 三井グループおよびグループ各社の「人」に焦点を当てた社会貢献活動やさまざまな取り組みを総称したPR「三井ヒューマンプロジェクト」をスタート。



「三井ヒューマンプロジェクト」新聞広告
(日経新聞 2009年4月2日付)

2009

[平成21年]

- 三井グループ社員の相互理解を深めるグループ・コミュニケーション誌「MITSUI Field」を創刊。
- 三井の事業精神や先見性、創造性をグループ各社に改めて知っていたくことを目的に、DVD「三井のこころ」を制作。



「MITSUI Field」創刊号

2000年代

三井広報委員会は、これまで「クローズアップ・オブ・ジャパン」や「三井シンポジア・トゥモロウ」などを通じて、海外での現代日本の文化に対する認識を高めるとともに、国内においても人々の文化的関心の高まりに大きく貢献してきました。しかし、当初は珍しかったこれらの事業スタイルも、年々さまざまな団体が行うようになり、三井広報委員会が“開拓者”として目指した役割は終えたと考えられるようになりました。そこで、1年以上をかけて模索し出した答えが、これまでの事業をさらに進化・発展させた新たな文化支援活動「三井コラボレーション」でした。国内外で活躍するアーティストに交流の場を提供し、コラボレーションを通して新しい日本文化の創造を図るもので、アーティストに自らのテーマに取り組む場を提供して国内外で公開し、さらにそのプロセスや作品をドキュメントとして残し、活用していくことを目的としました。1998年のスタート時に趣旨に共鳴して参加したアーティストは、ピアニスト・作曲家の国府弘子氏、CGアーティストの原田大三郎氏、アコーディオン奏者のcoba氏、狂言師の和泉元彌氏、作

曲家の三木稔氏の5人で、12月の記者発表では各氏より期待と抱負が述べられました。また、八尋俊邦会長(当時)は「新しいものが定着するまでにはこれから実績を重ねていく必要がある。皆様から忌憚のない助言をいただき、日本文化を支えるために、絶え間ない支援、努力をしていくつもりです」と決意を語りました。その後2004年まで、国内はもとより、海外における日本との交流行事にて公演を行うなど、いずれも成功をおさめました。

「ふれあいマーケット」など 三井グループとしての 社会貢献活動を開始 (1999～2008)

三井広報委員会では、三井グループが積極的に展開すべき活動は文化支援だけにとどまらず、何らかの社会的な貢献も必要ではないかと考え、1999年10月に札幌で開催された「三井コラボレーション」の会場において、グループとしての社会貢献活動をスタートさせました。札幌市には、障がいのある方々がさま

ざまな商品を作りながら社会参加を目指すネットワーク組織・札幌市小規模作業所連絡協議会があり、その傘下の小規模共同作業所に販売の場を提供し、三井グループ各社の社員がエプロン姿で販売を手伝いました。作業所で心を込めて作られた商品の販売に協力することで、少しでもその認知向上に役立てればとの想いで行った結果、商品に対する好意的な評価とともに、参加した社員からは、社会貢献の大切さを実感できたとの声が多く寄せられました。そこで三井広報委員会では、この活動を「ふれあいマーケット」と名付け、その後行われた「三井コラボレーション」の会場にて開催したのち、2003年からスタートする「ふれあいトリオ」事業の一環として、継続的な活動へと展開していきました。

文化・教育・福祉の 支援プログラムとして 「ふれあいトリオ」を開始 (2003～08)

2003年4月からは新たな事業として「ふれあ

いトリオ」を開始しました。“教育+文化支援”をコンセプトに全国各地にクラシックの演奏家を派遣し、現地ホールが主催する「ふれあいコンサート」、近隣の小中学校などでミニコンサートと音楽指導を行う「ふれあいプログラム」、そしてコンサートホールのロビーで障がいのある方々の作業所で作られた商品の販売機会を提供する「ふれあいマーケット」、これらを「ふれあいトリオ」の3つの柱として展開。生の音楽を聴く機会の少ない子どもや高齢者・障がいのある方などに質の高い音楽にふれていただく場を提供するとともに、ヴァイオリンの演奏体験や音楽にあわせて体を動かすボディパーカッションなど、聴衆や開催地域との一体感を生むイベントとして大きな盛り上がりを見せ、2008年の事業終了までに全国各地で約250公演を行い、参加者は延べ約6万人を数えました。

三井グループ内の相互理解と グループ意識の醸成を目指して 三井グループ・コミュニケーション誌 「MITSUI Field」を創刊 (2009～)

野球を中心としたスポーツ支援というアウトター(三井グループ外)向けの活動と並行して、2009年1月、インナー(三井グループ内)向けに、グループ各社の相互理解とグループ意識の醸成を目指して、三井グループ・コミュニケーション誌「MITSUI Field」(季刊)を創刊しました。350余年という三井の歴史を踏まえながら、現在のグループ各社社員間の相互理解とコミュニケーションの活性化の一助となるべく、毎号三井の歴史やグループ各社とその社員の情報をさまざまな角度から紹介しています。2018年10月には創刊から10周年、2021年4月の発行号をもって50号に到達。これまで延べ1,000社を超える企業や施設を紹介してきた本誌は、これからも三井グループ内における貴重な情報共有ツールとして、発行を続けていきます。

少年野球指導者を対象とした 「三井ゴールデン・グラブ 野球教室」を開催 (2010～)

2008年には、「人の三井」という三井グループらしさをベースに、人を大切に多様な個性

と価値を尊重することで社会を豊かにしたいという想いを込めて「三井ヒューマンプロジェクト」を立ち上げました。その一環として2010年3月より、三井ゴールデン・グラブ賞を受賞した元プロ野球選手を講師とする、少年野球の指導者を対象とした野球教室「三井ゴールデン・グラブ野球教室」をスタートさせ、毎年、全国各地で開催しています。指導者を対象にした野球教室は珍しく、受講者からも好評を博しています。2014年には10回、2019年には20回の開催を数えました。第10回福岡教室、第20回越谷教室という節目の回では、王貞治氏がゲスト講師として参加。世界のホームラン王自らバッティングの秘訣を披露したほか、三井ゴールデン・グラブ賞を9回受賞している名ファーストとしての守備の意識などについて、参加者に熱く語りかけました。また越谷教室では、三井広報委員会会員会社であるエムサービスの公認スポーツ栄養士による食事指導をカリキュラムに採り入れ、参加者から好評を博しました。コロナ禍で2020年以降は中止を余儀なくされましたが、

2010

[平成22年]

- 三井ゴールデン・グラブ賞を受賞した元プロ野球選手を講師とする指導者向け野球教室「三井ゴールデン・グラブ野球教室」をスタート。



「三井ゴールデン・グラブ野球教室」

2011

[平成23年]

- 「三井ゴールデン・グラブ賞」40周年を迎える。40周年の記念としてBSフジ特別番組「第40回三井ゴールデン・グラブ賞 ～球史を飾った名手たち～」、記念誌「三井ゴールデン・グラブ賞40年の軌跡」を制作。



「三井ゴールデン・グラブ賞」40周年を記念し、表彰式には山本浩二氏、福本豊氏が来場

2012

[平成24年]

- 「三井広報委員会」発足40周年を迎える。40年のあゆみを振り返る記念誌「三井広報委員会40年史」を制作。



「三井広報委員会40年史」

2013

[平成25年]

- 東日本大震災で被災した子どもたちへの教育支援を行う「公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(CFC)」の活動に賛同し、寄付を実施。

2014

[平成26年]

- 特別ゲストに王貞治氏を迎え、第10回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を福岡で開催。

- CFCから感謝状を授与される。



「がんばろう東北デー」に子どもたちを招待。

2015

[平成27年]

- 日本の伝統文化の発展に寄与する取り組みを行っている担い手を表彰する「三井ゴールデン匠賞」を創設。



第1回「三井ゴールデン匠賞」ポスター

2019

[令和元年]

- 特別ゲストに王貞治氏を迎え、第20回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を越谷(埼玉県)で開催。



2021

[令和3年]

- 「MITSUI Field」50号を発行。



- 「三井ゴールデン・グラブ賞」50周年を迎える。50回記念企画「三井ゴールデン・グラブレジェンズ」を実施。



2022

[令和4年]

- 「三井広報委員会」創立50周年を迎える。50年を振り返る特設サイトや記念誌を制作。



2010年代

2022年に再開。今後も全国各地で本教室を開催し、子どもたちが大好きな「野球」というスポーツにケガをせず一生懸命取り組めるように、子どもたちの夢を応援していきたいと考えています。

東日本大震災で被災した子どもたちを支援 チャンス・フォー・チルドレンへの寄付 (2014～2016)

2011年3月11日に発生した東日本大震災は甚大な被害をもたらし、復興に向けて三井グループ各社もさまざまな取り組みを行っていました。そうした中、三井広報委員会は「公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(以下、CFC)」への寄付を通じ、被災した子どもたちを支援することを決定。子どもたちの教育格差の解消を目指し、主に経済的な理由により塾や習い事などの学校外教育の機会を得られない子どもたちに“奨学クーポン”を提供するCFCに、2013～2015年度までの3年にわたって寄

付を実施しました。また寄付のみならず、2014年には、楽天野球団が主催する「がんばろう東北デー」として開催された東北楽天ゴールデンイーグルス対埼玉西武ライオンズの試合に、仙台の子どもたちや保護者40名を招待。試合観戦に加え、通常観ることのできないスタジアムのバックヤードや試合前の練習風景見学、三井ゴールデン・グラブ賞受賞選手との記念撮影も行い、日頃、教育クーポンを活用して勉学や習い事に励む子どもたちに、プロ野球の魅力を直に感じる特別課外体験の機会を提供しました。同イベントには翌年も協賛し、前年同様に40名を招待しています。

日本の伝統工芸発展に取り組む 「匠」を顕彰 「三井ゴールデン匠賞」を創設 (2015～)

2020年に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックに向け、世界から日本への注目が高まる中、三井広報委員会は日本の伝統工芸

に着目。後継者不足などの課題を抱えている伝統工芸界において、受け継がれた技術を磨き、新たなアイデアを積極的に取り入れ、未来に向けて産業や地域の発展に貢献している担い手に、注目と評価が集まる機会を創出したいという想いのもと、2015年に「三井ゴールデン匠賞」を創設しました。経済産業省(第1回～第4回まで)、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会が後援となり、多様な分野の有識者を審査員に迎え、日本が誇る伝統工芸文化の価値を発信していくことを目指しています。賞の揮毫は数々の題字を手掛けてきた、書道家の武田双雲氏によるものです。本賞は第4回まで隔年で開催され、合計20組の「三井ゴールデン匠賞」受賞者を選出。2021年度に実施された第4回では、審査員特別賞と奨励賞という新たな賞が設けられ、それぞれ2組が受賞しています。三井ゴールデン匠賞は第5回より、賞の企画運営についての安定化や受賞者支援の充実を図り、これまで隔年で行っていた表彰の頻度を3年に1度としました。また、賞の名称などを

一部変更。一般投票で選ばれる「モストポピュラー賞」は「オーディエンス賞」に、一次審査通過者である「ファイナリスト」は「入選」と改めました。第5回三井ゴールデン匠賞は2024年10月に受賞者を発表。三井ゴールデン匠賞に池田晃将氏(蒔絵・螺鈿／石川県)、エゴノキプロジェクト実行委員会(代表:長屋一男氏／岐阜和傘／岐阜県)、彦十蒔絵(代表:若宮隆志氏／輪島の変塗／石川県)、久恒俊治氏(加賀友禅／石川県)、別府竹製品協同組合(代表:岩尾一郎氏／別府竹細工／大分県)の5組を選出。また審査員特別賞に木村正人氏(津軽塗／青森県)、東中江和紙加工生産組合(代表:宮本友信氏／越中和紙／富山県)の2組、奨励賞に東京水引(代表:中村江美氏／水引細工／東京都)、針谷絹代氏(山中漆器／石川県)の2組を選出しました。本賞の公式サイトでは、過去の実績者や最終選考まで残った応募者の皆さんを紹介しているほか、受賞者の方々に話を伺う「匠を訪ねて」などを掲載しています。三井広報委員会では、これからも本賞を通じ

て日本の伝統工芸と、その発展のために尽くす「匠」たちを応援していきます。

50周年記念に特設ページ動画を制作 三井広報委員会の姿を広く発信 (2022)

三広会を発展的に解消し、1972年に発足した三井広報委員会。それから50年の間には、多様な事業を展開し、社会の繁栄と福祉に寄与してきました。2022年、三井広報委員会は50周年を迎えたことを記念し、公式サイト内に特設ページを設置。その中では、これまでのあゆみと、代表的な事業を振り返る動画コンテンツを設けています。日本の現代文化を海外に紹介するという大きな使命を果たすべく、1983年から1998年までの16年間にわたり、世界18都市で開催した「クロスアップ・オブ・ジャパン」。プロ野球界のタイトルの中で唯一、守備によって獲得することができる賞であり、多くのプロ野球選手が目標にしていると話す「三井ゴールデン・グラブ賞」。

三井グループの相互理解を促進するため、さまざまな“場”で活躍する人や企業を紹介するコミュニケーション誌「MITSUI Field」。そして、延宝元年(1673)に三井高利が江戸・日本橋で「越後屋呉服店」を開いて以来、350年にわたる歴史と伝統を積み重ねてきた三井グループが、同じように長い伝統を築いてきた“工芸”の分野において、未来に向かって発展していくための取り組みやそれを担う人々たちを称えるために創設した「三井ゴールデン匠賞」。「三井ゴールデン・グラブ賞」では、遊撃手・三塁手として通算10回本賞を受賞している宮本慎也氏(元東京ヤクルトスワローズ)に、本賞への想いや賞の価値について話を伺っています。「三井ゴールデン匠賞」では、第4回の三井ゴールデン匠賞と、一般投票で選ばれるモストポピュラー賞を受賞した宮本雅夫氏(九谷焼／石川県)に、受賞の喜びや賞の理念に対する想いをお話しいただいています。ぜひご覧ください。

三井広報委員会 これまでのあゆみ

1961年	●1月1日、三井グループ8社により、三井広報委員会の前身である「三広会」が発足。 ●7月31日、テレビ番組「兼高かおる 世界の旅」の番組スポンサーが三井物産から三広会へ。
1970年	●4月、三井物産から「三井グラフ」が創刊。
1972年	●4月1日、三広会を発展的に解消し、「三井広報委員会」が発足。
1977年	●3月27日、同日放送分の「兼高かおる 世界の旅」がスポンサーとして最後の番組となり、4月3日からはテレビクイズ番組「世界をあなたに」をオンエア。
1978年	●4月2日、「世界をあなたに」に替わり「世界にかける橋」の提供開始。 ●夏休みに「相模湖ピクニックランド」（神奈川県）と「三井グリーンランド」（福岡県）で、子どもたちに虫かご2万個をプレゼント。
1980年	●4月27日、提供テレビ番組「世界にかける橋」で鳥飼玖美子さんのワンポイント英語コーナーを新設。 ●12月、「三井グラフ」通刊42号から三井広報委員会の発行となる。
1981年	●5月7日、震が関ビル36階に三井グループのPRの場「三井スカイpromナード」がオープンし、11日より無料公開。
1982年	●9月26日、同日放送の「世界にかける橋」をもって同スポンサーを終了。
1983年	●5月7日、第1回「三井シンボジア・トゥモロウ」を大分市で開催。 ●9月14日～11月30日、第1回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をサンフランシスコで開催。
1985年	●2月6日～4月14日、第2回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をロンドンで開催。 ●11月17日～86年2月28日、第3回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をニューヨークで開催。
1986年	●4月20日～7月20日、第4回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をミネアポリス（米国）で、9月1日～10月26日にはロサンゼルスで開催。 ●11月26日、三井広報委員会が提供を引継ぎ、ダイヤモンドグラブ賞から「三井ゴールデン・グラブ賞」に名称を改め、12月10日に表彰式を開催。
1987年	●10月14～29日、第5回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をパリで開催。
1988年	●5月12日～6月17日、第1回「三井フェスティバル東京」を開催。 ●5月18日～7月3日、第6回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をシドニーで開催。 ●10月、三井広報委員会企画のPR映画「三井300年の歩み」が完成。
1989年	●11月3日～12月17日、第7回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をバンコクで開催。 ●成城大学、青山学院大学、学習院大学などの学園祭における街の清掃活動「CAMPUS SWEEPER 学園キャラバン隊」を応援。大学周辺の商店街などを清掃するというもので、地元の人々からも好評を得る。

1990年	●5月10日～6月10日、第2回「三井フェスティバル東京」を開催。 ●6月、JR有楽町駅に三井広報委員会の電飾看板を掲示。 ●8月31日、1981年から続いた「三井スカイpromナード」終了。 ●9月27日～10月19日、第8回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をトロント(カナダ)で開催。
1991年	●4月24日～5月9日、第9回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をクアラルンプール(マレーシア)で開催。
1992年	●4月1～30日、第10回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をベルリンで開催。 ●5月21日～6月7日、第3回「三井フェスティバル東京」を開催。 ●三井広報委員会発足20周年として、11月2日に東京・池袋で「山下洋輔ピアノコンサート」および20周年記念レセプションを開催。
1993年	●4月27日～6月27日、第11回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をリスボン(ポルトガル)で開催。
1994年	●5月6日～6月11日、第4回「三井フェスティバル東京」を開催。 ●9月27日～10月9日、第12回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をアトランタ(米国)で開催。
1995年	●10月30日～12月17日、第13回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をサンパウロ／リオ・デ・ジャネイロ(ブラジル)で開催。
1996年	●6月3～15日、最後となる第5回「三井フェスティバル東京」を開催。 ●6月6～30日、第14回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をジャカルタ(インドネシア)で開催。
1997年	●2月8日～3月2日、第15回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をニューデリー(インド)で開催。
1998年	●1月30日、「三井シンボジア・トゥモロウ特別企画『誰でもわかるオペラ入門～三枝成彰のトークとオペラアリアコンサート』」を東京で開催。3月をもって、「三井シンボジア・トゥモロウ」終了。 ●7月8日、三井広報委員会の国際文化交流支援活動が評価され、「外務大臣表彰」を授与される。 ●9月11日～10月3日、最後となる第16回「クロースアップ・オブ・ジャパン」をモスクワで開催。 ●12月16日、「三井コラボレーション」の国内第1弾、「国府弘子サウンドスケッチ in ジャパン(国府弘子+りんけんバンド)」を那覇で開催。 ●三井広報委員会ホームページ開設。
1999年	●6月9日、「三井コラボレーション『原田大三郎CG in シンフォニー“メタボール”』」を東京で開催。 ●7月8～16日に「三井コラボレーション」の海外第1弾を北京／上海で開催。 ●7月24日、coba氏プロデュースの「三井コラボレーション『ミュージックスペース“テクノキャバレー”』」を新潟で開催。 ●10月13日、「三井コラボレーション『国府弘子サウンドスケッチ in ジャパン』」を札幌で開催。同時に第1回となる「ふれあいマーケット」を開催。 ●11月21日「三井コラボレーション『リーディングドラマ“zelkova（ゼルカーヴァ）”』」を東京で上演。

2000年	●4月26・27日、5月5日、「三井コラボレーション」の海外第2弾をライデン／アムステルダム(オランダ)で開催。 ●7月14日、「三井コラボレーション『国府弘子サウンドスケッチ in ジャパン』」を大阪で開催。 ●10月20日、coba氏プロデュースの「三井コラボレーション『光と音のページェント“天使は空から降ってくる”』」を福岡で開催。
2001年	●1月25・26日、「三井コラボレーション『リーディングドラマ“天国の本屋”』」を東京で上演。 ●2月27・28日、「三井コラボレーション『ドラマコンサート“ミッシング・ピース”』」を東京で上演。 ●5月24～26日、「三井コラボレーション」の海外第3弾をロンドンで開催。 ●9月20～30日、「三井コラボレーション『ジミー大西×ジェーン・バッカー エキシビション“Energy of Nature”』」をロンドンで開催。 ●11月20日、「三井コラボレーション『国府弘子サウンドスケッチ in ジャパン』」を長野で開催。
2002年	●3月28～31日、「三井コラボレーション『リーディングドラマ“天国の本屋”』」を東京で上演。
2003年	●4月、文化・教育・福祉の支援プログラムとして「ふれあいトリオ」をスタート。北海道江別市を皮切りに、年間全国10ヶ所以上の市町村で開催。 ●11月3～30日、New York 日本ギャラリーにて開催の「ジミー大西作品展～原始の眼～」(主催：NY日本クラブ・吉本興業)に協賛。 ●12月4～27日、「リーディングドラマ『天国の本屋』」(出演：須賀貴匡・紺野まひる・ルー大柴)の再々演に特別協賛。
2004年	●映画「天国の本屋～恋火～」(配給：松竹主演：竹内結子 玉山鉄二)の日本語字幕版制作に協賛。
2007年	●7月、200回目となる「ふれあいコンサート」を開催。2008年の終了までに約250公演、参加者6万人以上を数えた。
2008年	●三井グループおよびグループ各社の“人”に焦点を当てた社会貢献活動や様々な取り組みを総称したPR「三井ヒューマンプロジェクト」をスタート。
2009年	●1月、三井グループ社員の相互理解を深めるグループ・コミュニケーション誌「MITSUI Field」を創刊。 ●三井の事業精神や先見性・創造性をグループ各社に改めて知っていただくことを目的に、DVD「三井のこころ」を制作。
2010年	●3月、三井ゴールデン・グラブ賞受賞歴のあるプロ野球OBによる指導者向け野球教室「三井ゴールデン・グラブ野球教室」をスタート。 ●映画「僕たちのプレイボール」に、三井ボランティアネットワーク事業団とともに協賛。
2011年	●「三井ゴールデン・グラブ賞」が40周年を迎え、記念特別番組(BSフジ)と記念誌を制作。
2012年	●「三井広報委員会」発足40周年を迎える。 ●3月、第5回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を大阪で開催。

2013年	●東日本大震災で被災した子どもたちへの教育支援を行う「公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(CFC)」の活動に賛同し、寄付を実施。
2014年	●9月、特別ゲストに王貞治氏を迎え、第10回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を福岡で開催。 ●10月、CFCと共同で子どもたちを東北楽天ゴールデンイーグルスの試合観戦に招待する特別課外体験企画を実施。 ●12月、CFCから感謝状授与。
2015年	●9月、日本の伝統文化の発展に寄与する取り組みを行っている担い手を表彰する「三井ゴールデン匠賞」を創設。第1回の募集を開始。 ●9月、CFCと共同で子どもたちを東北楽天ゴールデンイーグルスの試合観戦に招待する特別課外体験企画を2年連続で実施。
2016年	●3月、第1回「三井ゴールデン匠賞」贈賞式を開催。 ●11月、福井県越前市で開催された第33回伝統的工芸品月間国民会議全国大会に、「三井ゴールデン匠賞」ブースを出展。会場で受賞者によるシンポジウム実施。
2017年	●3月、第15回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を町田で開催。
2018年	●3月、第2回「三井ゴールデン匠賞」贈賞式を開催。
2019年	●9月、特別ゲストに王貞治氏を迎え、第20回「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を越谷(埼玉県)で開催。
2020年	●3月に予定していた第3回「三井ゴールデン匠賞」贈賞式を、新型コロナウイルス感染拡大により中止。
2021年	●4月、「MITSUI Field」50号を発行。 ●12月、第50回「三井ゴールデン・グラブ賞」表彰式を開催。特別ゲストとして王貞治氏が来場。記念企画「三井ゴールデン・グラブ レジェンズ」投票実施。
2022年	●1月、「三井ゴールデン・グラブ レジェンズ」贈呈式を開催。企画アンバサダーの里崎智也氏から、選出された選手を代表し井端弘和氏に金の革製記念盾を贈呈。 ●3月、第4回「三井ゴールデン匠賞」贈賞式を開催。 ●4月、「三井広報委員会」発足50周年を迎える。 ●10月、「三井ゴールデン・グラブ野球教室」を3年ぶりに再開し、山口で開催。
2024年	●10月、第5回「三井ゴールデン匠賞」受賞者を発表。 ●12月、第5回「三井ゴールデン匠賞」受賞者・入選者作品を青山スクエアで展示。

三井の歴史

三井の歴史は、三井高利が延宝元年（1673）に現在の東京・日本橋本石町に「三井越後屋呉服店」を開業したところから始まりました。越後屋は「現銀（金）掛け値なし」「店先売り」など画期的な新商法で事業を進展させ、金融業に進出、後の拡大への礎を築きました。三井グループは、越後屋呉服店の創業以来350年を超えて、現在に続いています。

江戸期

三井高利の「越後屋」

江戸の庶民に呉服を広め、
独創的な販売手法で飛躍的に成長

三井の歴史は、三井高利が延宝元年（1673）に開業した「越後屋呉服店」に始まる。越後屋は「現銀（金）掛け値なし」「店先売り」などの画期的な商法で事業の飛躍的拡大に成功。18世紀には量販小売店として世界最大規模を誇るに到った。天和3年（1683）に新設した両替店は、幕府公金「御為替御用」を引き受け、呉服と並ぶ三井の主要事業となった。宝永7年（1710）、事業と一族を統轄する大元方を設置し、享保7年（1722）には三井家の家憲「宗竺遺書」が制定された。事業の共有制が三井の原則となり、それは第二次世界大戦後の財閥解体時まで維持された。

明治期

三井の財閥体制確立

銀行、物産、鉱山を基盤に、
人材重視と各社の連携で発展

幕末から明治維新にかけて多くの豪商が没落していく激動期を、三井は“大番頭”と称された三野村利左衛門の活躍によって乗り越えた。維新後は新政府の公金取扱を担い、明治9年（1876）に、三井銀行（現・三井住友銀行）と旧三井物産[※]を創立。明治21年（1888）には官営三池鉱山を落札し、三井鉱山に発展させた。旧三井物産の益田孝、三井銀行の中上川彦次郎、三井鉱山の團琢磨など傑出したリーダーの指揮による各社の発展によって三井の事業基盤が固められ、日本の近代化にも大きな貢献を果たした。明治42年（1909）に持株会社・三井合名会社が設立され、財閥としての体制が確立した。

※ 法的には旧三井物産と現在の三井物産には継続性はなく、全く別個の企業体である。

1673	1683	1710	1876	1909	1929	1946	1950	1961	2005	2011	2013	2023
三井高利が江戸本町に三井越後屋呉服店、京都に仕入れ店を開業	江戸に三井両替店を開業	家政と経営を一元的に管理する大元方設立	日本初の民間銀行・三井銀行誕生、旧三井物産創立	三井財閥の持株会社・三井合名会社設立	東京・日本橋区駿河町に三井本館竣工	GHQの財閥解体指令により、三井本社解散	月曜会発足	二木会および三広会（現・三井広報委員会）発足	三井本館内に三井記念美術館開館	社会福祉法人三井記念病院の建替工事が全体竣工	三井グループ会員制クラブ「綱町三井倶楽部」竣工100周年	三井グループ350周年



三井高利夫妻像／三井家の元祖・三井高利（1622～1694）は延宝元年（1673）に江戸本町に三井越後屋呉服店、京都に仕入れ店を設けた。越後屋は「現銀（金）掛け値なし」「店先売り」「布の切り売り」「即座に仕立てて渡す」などの商法で、江戸、京都、大坂の三都に呉服店、仕入れ店、両替店をもつ大店となった。



「丸に井桁三」は三井高利が越後屋の暖簾に使用した三井の代表的な店章であり、天和元年（1681）頃から使用されている。着想は高利の母・殊法の夢想によるものと伝えられている。



駿河町越後屋正月風景図／現在の東京・日本橋室町にある三井本館と日本橋三越本店の間の日本銀行を望む通りは、江戸時代には両側に店を構える越後屋によって大いに賑わいを見せていた。

三井史を彩る人々



みつ い たかし
三井 高利
1622～1694年
三井グループの歴史の源となる三井家の元祖。画期的な新商法で財産を築いた。



なか み がわ ひこじろう
中上川 彦次郎
1854～1901年
三井銀行副長。官金依存型の経営から脱却させ、日本の近代工業の育成を図った。



みの むら り ざ えもん
三野村 利左衛門
1821～1877年
幕末維新期の三井の大番頭。幕府からの御用金の減額を実現し、三井銀行設立に貢献。



だん たく ま
團 琢磨
1858～1932年
三井合名会社理事長。三池炭礦事務長として世界的な最新技術を導入、三池港を築港。



ますだ たかし
益田 孝
1848～1938年
旧三井物産初代社長。海外貿易に乗り出し、近代日本の経済発展に尽くした。



い けだ せいひん
池田 成彬
1867～1950年
三井銀行常務取締役。外国支店の拡充、外国為替業務と証券業務に尽くした。

大正・戦前期

財閥としての成熟

昭和恐慌から戦時経済へ、
舵取りの難しい時代を迎える

第一次世界大戦期から1920年代にかけて、三井の各事業は飛躍的に発展し、傘下会社の数も増加、財閥としての成熟期を迎えた。その時代を象徴するのが、三井八郎右衛門高棟（三井合名会社社長）と團琢磨（同理事長）のコンビであった。昭和7年（1932）、昭和恐慌下での反財閥気運の高まりの中で、團が暗殺される。三井は、池田成彬を三井合名会社筆頭常務理事に登用して一連の改革策を打ち出し、難局を乗り切った。日中戦争から太平洋戦争の時代に、戦時経済のもとで三井の事業規模は一層拡大したが、経済統制や軍部への対応などに苦慮する時代でもあった。

戦後期

財閥解体とグループ集約

社会の発展を支え続けるために、
分断された三井各社が再結集

戦後、三井本社（三井合名会社の後身）は、GHQの指令にもとづき解散を余儀なくされた。三井傘下の各社は、親会社を失い、横の連携も分断されたが、昭和25年（1950）、三井19社の首脳が集まり「月曜会」が発足。さらに、昭和31年（1956）に「三井商号商標保全会」、昭和36年（1961）には三井グループを共同でPRする「三広会（現・三井広報委員会）」と中核企業の社長会として「二木会」が発足した。二木会、月曜会はその後も三井家事業の歴史を共有する企業の参加を得て、三井グループは日本を代表する企業グループとして存在感を示している。

現代期

日本屈指の企業集団へ

社会の繁栄と福祉に貢献し、
今なお広がる三井グループの輪

現在、三井グループは三井記念病院や三井文庫、三井記念美術館への支援、三井業際研究所における調査・研究、三井ボランティアネットワーク事業団の活動などをはじめ、様々なサステナビリティ活動を通じて、国際交流や地域社会の活性化、環境問題に貢献するとともに、社会の繁栄と福祉に寄与している。現在の三井グループは社長会である二木会加盟会社25社を中核企業として、この二木会加盟会社と月曜会加盟会社76社で構成されている。

昭和25年（1950）、三井19社の首脳が三井本館に集まり「月曜会」が発足した。昭和36年（1961）には三井グループをPRする三広会（現・三井広報委員会）、さらに中核企業の社長会として二木会が発足。三井グループは、その後も、事業活動に加えて三井記念病院や三井文庫、三井記念美術館への支援など社会の発展を支え続けた350年に及ぶ三井の使命を戦後も継続し、積極的に果たしている。（写真は三井グループ各社の支援により2011年に建替工事が全体竣工した三井記念病院）



※ 写真提供：公益財団法人 三井文庫／三井不動産／社会福祉法人 三井記念病院

一覧年表

江戸	
江戸初期	三井高俊（三井高利の父）が妻・殊法と伊勢・松坂で酒・味噌・質の商いを始める
元和8年 1622年	三井家の元祖・三井高利誕生
寛永12年 1635年	高利、14歳で松坂を出立、長兄の店に奉公する
慶安2年 1649年	高利、母・殊法の孝養のため松坂に帰郷
延宝元年 1673年	江戸本町1丁目に三井越後屋呉服店が開業
天和3年 1683年	本町の店を駿河町へ移し、その西隣に両替店を新設
元禄7年 1694年	高利、73歳で没
宝永7年 1710年	長男・高平が事業統括機関・大元方を設置
享保7年 1722年	高平が三井家の家訓・宗竺遺書を制定
慶応2年 1866年	三井家が三野村利左衛門を雇用、幕府御用金を減免

明治	
明治4年 1871年	為換座三井組を設立
明治5年 1872年	日本初の銀行建築・海運橋三井組ハウス竣工 越後屋呉服店を三井家から分離
明治7年 1874年	駿河町為換バンク三井組ハウス竣工
明治9年 1876年	日本初の民間銀行・三井銀行設立 旧三井物産創立、初代社長に益田孝
明治21年 1888年	三池鉱山の民間払い下げを落札、團琢磨を招聘
明治22年 1889年	三池炭礦社設立
明治24年 1891年	中上川彦次郎が三井銀行入行
明治26年 1893年	三越呉服店を合名会社三井呉服店に改組 三井組を三井元方に改称 三井家同族会を設置 三井鉱山合資会社を三井鉱山合名会社に改称
明治35年 1902年	駿河町三井本館竣工
明治37年 1904年	三井呉服店を株式会社三越呉服店に改組、「デパートメントストア宣言」を発表し、日本初の百貨店化を打ち出す
明治39年 1906年	三井家の寄付により財団法人三井慈善病院（現・社会福祉法人三井記念病院）設立
明治42年 1909年	三井財閥の持株会社・三井合名会社設立

大正	
大正2年 1913年	綱町三井別邸竣工
大正3年 1914年	三井合名会社が理事長制導入、初代理事長に團琢磨就任
大正7年 1918年	三井文庫創立
大正12年 1923年	関東大震災で駿河町三井本館が類焼
大正15年 1925年	駿河町三井本館を解体、三井本館着工

昭和	
昭和3年 1928年	三越呉服店を株式会社三越に改称
昭和4年 1929年	三井本館竣工
昭和7年 1932年	三井合名会社理事長・團琢磨暗殺
昭和8年 1933年	三井合名会社初代社長・三井高棟引退、三井高公が家督を相続
昭和9年 1934年	財団法人三井報恩会設立
昭和15年 1940年	三井総元方設置 旧三井物産が三井合名会社を吸収合併
昭和16年 1941年	三井不動産設立
昭和18年 1943年	三井銀行と第一銀行が合併、帝国銀行発足
昭和19年 1944年	三井本社設立
昭和20年 1945年	GHQが財閥解体を指令
昭和21年 1946年	三井本社解散
昭和22年 1947年	旧三井物産、三菱商事に解散命令 過度経済力集中排除法施行、王子製紙、三井鉱山、大日本麦酒などに分割命令
昭和23年 1948年	帝国銀行が第一銀行を分離
昭和25年 1950年	三井グループの役員親睦会・月曜会発足
昭和29年 1954年	帝国銀行を三井銀行に改称
昭和31年 1956年	三井商号商標保全会設立 三井不動産、清算後の三井本社を吸収合併
昭和34年 1959年	三井物産大合同
昭和36年 1961年	三井グループの社長会・二木会、三広会発足
昭和40年 1965年	財団法人三井文庫設立
昭和45年 1970年	三井記念病院・BC棟竣工 大阪万博に三井グループ館出展

昭和47年 1972年	三広会が発展的解消、三井広報委員会発足
昭和50年 1975年	沖縄海洋博に三井こども科学館出展
昭和53年 1978年	三井業際問題研究所（現・三井業際研究所）設立
昭和60年 1985年	つくば万博に滝の劇場・三井館出展

平成	
平成2年 1990年	三井銀行と太陽神戸銀行が合併、太陽神戸三井銀行発足 花の万博に「三井・東芝館」出展
平成4年 1992年	太陽神戸三井銀行がさくら銀行に行名変更
平成8年 1996年	江戸東京たてもの園に三井八郎右衛門邸移築
平成9年 1997年	三池炭礦閉山
平成10年 1998年	三井本館が重要文化財に指定
平成13年 2001年	さくら銀行と住友銀行が合併、三井住友銀行発足
平成17年 2005年	日本橋三井タワーが完成 三井本館7階に三井記念美術館開館 愛・地球博に「三井・東芝館」出展
平成20年 2008年	三越と伊勢丹が経営統合、三越伊勢丹ホールディングス発足 三井記念病院・入院棟竣工
平成22年 2010年	三井文庫が公益財団法人に認定
平成23年 2011年	三井記念病院の建替工事が全体竣工
平成25年 2013年	三井報恩会が一般財団法人に移行
平成28年 2016年	日本橋三越本店本館が重要文化財に指定

令和	
令和元年 2019年	日本橋室町三井タワー竣工
令和2年 2020年	三井不動産と三井物産の共同事業「Otemachi One」竣工
令和5年 2023年	三井グループ350周年記念事業を開始

発行：三井広報委員会

三井広報委員会 事務局
〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-3 赤坂中川ビル3F
URL https://www.mitsuipr.com

制作：日本ビジネスアート（株）
制作協力：（株）三友新聞社



三井広報委員会

<https://www.mitsuipr.com>

三機工業
新日本空調
三井住友建設
サッポロビール
東レ
王子ホールディングス
デンカ
三井化学
日本製鋼所
三井金属
東洋エンジニアリング
三井E&S
商船三井
三井物産
三越伊勢丹ホールディングス
三井住友海上
三井住友銀行
三井住友ファイナンス&リース
JA三井リース
大樹生命
三井住友信託銀行
三井不動産
三井倉庫ホールディングス
エームサービス